

骨(皿)・手足などである。

つまり、口が空いているように見えるのは、初めから口を空けて埋葬されたのではなく、遺体の周りに空気がある状態で靭帯が腐ったために、下顎が下に落ちた結果なのである。さらにいうと、口と骨盤が開き、ひざの皿が外れている人骨は、全身が空隙環境だったと考えられ、痕跡はなくても棺状のものに入れられて埋葬されたと判断できるのである。

ただし、骨が動いていない人骨のすべてが棺状のものに入れられていなかったとは言い切れない。先の20号墓のように、偶然に板の隙間から緑色堆積物が入り込み、軟部組織の腐食する前に充填環境になった場合もあるからである。

また、奈良は、伊達市ポンマ遺跡1号墓(写真5)を例にして、下顎骨～寛骨までが動き、膝蓋骨が動いていない場合を、キナ(ゴザ)などに包まれて置かれ、その上から土を被せて埋葬されたものと想定している。つまり、キナに包まれることにより、キナと密着する部位と隙間となる部位が生じるからである。ここではこのような例を「部分的空隙環境」と呼ぶことにする。

このような観点で14号墓を見てみよう(写真6)。人骨は、下顎骨・胸郭・骨盤・膝蓋骨と、全身にわたって動いており、明らかな空隙環境といえる。しかも、漆盆・漆椀・マキリ・中柄の出土状況から、本来縦に副葬されていた漆盆が、遺体側に倒れ、同時に中柄が散乱した状況が見て取れる。つまり、14号墓は20号墓と同じ木棺・木槨構造と副葬品を置く拡張部を持っていたことがわかるのである。

■出土遺物への応用

今回の調査で、人骨から明らかに空隙環境・充填環境と判断された墓の遺物を観察した結果、遺物にも環境により違いが現れることがわかった。

例えば、充填環境にある漆器は、内部の木質が腐食し、表面の薄い膜のみであっても、縦に入れられた漆盆は原形どおりに縁部分と底面が垂直の状態にあり、漆椀は伏せられた状態で、変形せずに半球状を保っている(写真4)。

一方、空隙環境にある漆器は、本来立体的であった漆椀が潰れ、太腿上に存在した漆盆の大半は飛散して原形を留めていない。この状況は、木棺・木槨構造により、空隙環境にあった漆器が木質の腐食した段階で外から土砂が流入し、飛散したと考えられる。つまり、漆器の「木質」部分は、遺体の「腱・靭帯」に相当し、各環境下で腐食後に生じる現象は遺体の場合と同じなのである。

このように、遺物についても同じ理論で説明できることから、人骨の全体部位が遺存していない墓でも判断が可能となる。さらに、人骨と遺物の双方を組み合わせることで、より複雑な墓の構造の解釈も可能になった。

■Us-b 火山灰中の「ひび割れ」が示すもの

当遺跡では、調査区一面に約50cmの厚さでUs-b火山灰が堆積している。墓の上に覆っているこのUs-b火山灰の断面を観察すると、「ひび割れ」と断層が見られる場合がある(写真7)。これは、Us-b火山灰が堆積した後に墓の内部が陥没したことを示す。



写真5 キナに包まれた人骨
[部分的空隙環境]
: ポンマ遺跡1号墓



写真6 空隙環境の人骨と拡張部から倒れた副葬品
: 有珠4遺跡14号墓



写真7 火山灰中の「ひび割れ」と断層: 有珠4遺跡10号墓

墓内部の陥没は充填環境の遺体が腐食した場合でも起こりうるが、より顕著に表れるのは、木棺・木槨構造の場合である。これは遺体や副葬品の他に空気の容積が加わっているからである。

事実、ひび割れと断層が見られる墓 4 例は、すべて人骨・遺物から見て木棺・木槨構造による空隙環境であったと判断されている。

■墓が作られて埋まるまで

人骨と副葬品の出土状態と、土層断面を丁寧に観察することにより、墓がいつ、どのように作られ、どうやって埋まったかを明らかにできる。

具体例を示すと、10 号墓は墓穴に成人男性が副葬品を伴って埋葬されている墓である（写真 8）。構築時期は 2 つの火山灰との関係から 1640～1663 年に限定される。人骨は下顎骨が下方にずれていることから空隙環境か部分的空隙環境といえる。遺物の観察では、頭骨から胸骨上にある漆器は、いずれも扁平に潰れており、漆盆の縁の一部が飛散している。このことから、遺体及び漆器は軟部組織と木質が腐食するまで空隙環境にあったといえる。また、遺体の右上腕骨近くに中柄が束のまま出土しており、中柄は充填環境にあったことが確認できる。よって、この墓は遺体と副葬品（中柄・マキリ・キセリ）の間に側板を持つ木棺・木槨構造であったと判断できる。

埋葬の過程を復元してみる。まず墓穴が掘られ、棺に入れられた遺体が中に入れられる、あるいは墓穴の中で組み合わされた箱状の構造物に遺体が安置される。漆器とエムシは木棺・木槨構造の中に、矢筒に入った矢、マキリ、キセリは外に置かれる。次に、木棺・木槨構造の上をわずかな土砂で埋め戻す。この時にはすでに蓋がされている。その後、墓坑内の有機質の腐食が進行中のある段階で、Us-b 火山灰が降下し、墓穴上とその周



写真 8 空隙環境の人骨：有珠 4 遺跡 10 号墓

表 3 墓の構造と梱包方法別の遺構数

墓の構造	梱包	遺構数
I. 木棺・木槨構造を持つ墓		9 基
II. 素掘りの墓	a 無梱包	2 基
	b キナ	3 基
III. 掘り込みを持たない墓		1 基
IV. 不明		6 基

※1663 年以前だが Ko-d 火山灰との関係が不明なもの 1 基あり

囲に平坦に堆積する。ある程度、火山灰が圧縮された段階で、木棺・木槨構造の蓋が壊れ、蓋上の土層がそのまま陥没する。この時、空隙環境であった遺体及び副葬品は急激な加重により、一部が移動・損壊したと考えられる。

■近世アイヌ墓の多様性

上記のような観察をすべての墓に対して行った結果、表 3 のような墓の構造が確認された。17 世紀半ばの有珠地区のアイヌ墓には、木棺・木槨構造を持つ墓と、素掘りの墓、掘り込みを持たない墓の 3 型式が存在しており、素掘りの墓には、遺体を直葬する場合と、キナで包む場合の二つの形態があることがわかった。

■文献資料との照合

元和 4（1618）年に松前で布教したジロラモ・デ・アンジェリスの記録にアイヌ民族の埋葬に関する記述がある（児玉 1954）。これによると、「富裕な者は死骸を納める大きな一つの箱を備えて、直ちにそれを埋葬する。貧乏人は一つの囊の中に死骸を入れ、同様の方法でそれを埋葬する」とあるように、木棺あるいは木槨の存在を示す「箱」と、キナを想起させる「囊」という記述がある。

アンジェリスの記述は、今回検討したうちの「木棺・木槨構造を持つ墓」と「素掘りでキナに包んで埋葬する墓」に当てはまる。しかし、有珠 4 遺跡では、「掘り込みを持たずに土で覆っただけの墓」や、「素掘りで遺体を直葬する墓」も発見されているが、これらについての記載はない。このことは、実際の近世アイヌ墓の構造と遺体の扱い方は多様なものであるが、文献記録にはその一部のみが記された、と考えた方がよさそうである。同様に、「富裕な者」、「貧乏人」といった表現が妥当なものであるかも検討の余地がある。なぜならば、今回の調査で小児墓はすべて素掘りで直葬されており、年齢など他の要素が関連する可能性があるからである。これらの違いがいかなる要因によるものであるかは、副葬品の